佐伯雑記（六）

増村隆也

佐伯の高僧

佐伯の高僧には乾堂・真誉・依教・廉州・鼎州・孝誉等が居た。

乾堂は養賢寺の住持にして一身に藩主高慶の信任を集め高僧の誇り高かった。一夜高慶が突然乾堂の室に乗り込んだ時、乾堂は炉にかけた粥を食べている所であった。高慶は今煮ている物は何かと詰問した。乾堂は老いて台所の流しにざるをかけ、集めた飯をほして保存し今粥に作って食べている所だと答え、益々信任を厚くした逸話が残っている。真誉は潮谷寺の住持にて広く経典に通じ、よく戒律を守った高僧である。廉州は切畑洞明寺の住持にして、よく禅理に通じ声明広く知られ、藩は進めて城下町外衆寺の上とした。依教は大日寺の住持にして、学徳高く藩命により尺間山に登り、雨を降らせて自ら持参した簑笠を着て山を下ったと言う。鼎州は養賢寺の住持にして、博学で禅理に明かるかった。第1回の長州征伐の時使して流血惨事を見ずに終ったのは県州の力であった。孝誉は潮谷寺の住持にして博学を以って知られた。

どうの首

沖松浦の郵便局の南方約2町の所にどうの首と呼ぶ所があり、昔から象の首か、銅で作った人の首か知らぬが首が出ると言われ、誰一人夜間は怖がって通る人がなかった。どうの首の附近は開墾すると五輪のかけらが出て来て、古老はこの地に平家の落人の墓があったのだと言っている。

徳川時代中期の頃、細島通いの塩船が佐伯の沖で暴風に遇い沖松浦に避難した時、船頭の吉左ェ門はこのどうの首の話を聞きこれは面白い一つ試して見ようと、一夜どうの首に出かけると果して噂の通りどうの首が出て来た。それが象の首であったか銅の首であったか伝えられていないが、吉左ェ門が持ち帰ったのは大判小判であったとも言う。吉左ェ門はその御礼に沖松浦の庵に千石船一ぱいの塩を埋めて庵の屋敷内に末代草の生えないようにし、更に石燈を建てて去った。どうの首は庵の脇下にあって五輪塔があり、庵の屋敷には今でも草は生えぬという。

長瀬原の怪

文政5年（一八二二）正月、大越の庄屋が天正14年（一五八六）の長瀬原の戦に、敵のさる侍のさしていた刀が家に伝っていたのを腰にさして、堅田の大庄屋に年始に行っての帰り道に、長瀬原にさしかゝるとウトウトと眠くなり堪まりかねて道端の石に腰かけ、其のまゝ深い眠りに落ちてしまった。この長瀬原は天正14年（一五八六）佐伯惟定が島津家久の兵と堅田の野に戦った時、柳井左馬助が支隊となり、3百の兵を率いて薩将外庄狩野介の兵を斬殺し、杉谷兵庫亟・近藤久左ェ門・三代勘解由が奮戦し、又矢野美作が薩人の袍に金文字で一足不去と書いた者に戦を挑み反って首を取られ、美作の子大炊介が父の仇をうち敵の袍を奪って父の首を包み、敵の首を自分の刀に刺して帰り、又高畑伊豫守が敵将新納治右ェ門の捨てて逃げた馬印を拾って招くと、大将治右ェ門と間違え物蔭から大将の元に集まり来る敵を、佐伯勢が取り囲んで斬った所である。この為久しい間雨の夜は怪しい火が燃え色々と噂が飛び、夜は誰一人通る者はなかった。眠りに落ちた庄屋は折りから起る鬨の声・剣戟の響、敵の一隊が攻め寄せると見る間に「取った」と言う大きな声に驚いて目を覚ますと、自分は石から転げ落ち今迄腰に差していた刀は取られていた。余りの恐ろしさに震えあがりこれを大庄屋に話した。大庄屋芦刈惟繁とその子惟延は文政5年正月、輪当午（トオゴ）の塔を長瀬原の古戦場に建て、衆僧を招いて供養しその亡霊を祀った。長瀬原の碑の裏面には天徳寺沙門桓仙、江国寺桑門佐仁宝の書いた漢文の碑文が彫られてある。

番匠の御仕置場

上岡駅から番匠橋に向って行くと白木の鼻の鉄橋の下に南無妙法蓮華経と大きく書いた題目塔がある。ここは旧藩時代罪人の首を斬った所で、罪人の首はそこにさらし首にされていた。何人かの罪人が今断たれんとする首を前に突き出して後生を祈った事であろう。旧藩時代こゝにどこの処刑場にも建てられている様に題目塔が建てられた。打ち首にする時罪人が南無妙法蓮華経と後上りに最後の御題目をとなえたのでは首切り役人も刀を打ち下すのに調子が悪いが、南無阿彌陀仏と言うと句切りが良くて調子よく首が斬られたと言うが、どう言う訳かどこの首切り場にも南無阿彌陀仏とは書いてなく、南無妙法蓮華経と書いてある。これは法華経が悪人成仏の妙経であると古くから信じられた為であると言う。白木の鼻の題目塔は苔蒸して梅林の中に淋しく建てられて、通る人々を心淋しく思わせていたものであるが、昭和

17年（一九四二）9月、野津市の芦刈宝五郎の奇特な寄付によって、現在の題目塔に改造され旧観を改めた。この地の露と消えた幾多の罪人も成仏した事であろう。この芦刈氏の挙も人を広く愛する心の現れである。

伊能忠敬と佐伯

幕府天文方伊能忠敬が坂部貞兵衛と共に文化7年（一八一〇）2月15日佐伯に来て海岸の測量を行い、30余日滞在の後、仝年4月2日佐伯を出発した。

忠敬は蝦夷の地から海岸の測量を始めて、日本全国の海岸を測量し、大日本沿海輿地図を完成した人で余りにも有名である。

この地図が日本で作られた最も正確な地図であった事は勿論で、現在の元陸軍省5万分の1地図（現在の地理調査所発行、明治36年測図）と比較して遜色のないものであった事は敬服の外はない。

元禄11年（一六九八）12月佐伯藩から幕府に提出した領内の地図は、忠敬の地図に比べれば幼稚なものであるが、興味深いものである。今佐伯に伝っているものは極めて少ない。

高山彦九郎と佐伯藩

寛政の3奇人の1人高山彦九郎が寛政4年（一七九二）11月15日佐伯の城下に訪れて来た。藩では家老の梶西典令が彦九郎に会った。典令は幼少の時から読書を好み群書を渉猟し、8代高標が抜擢して家老とした人で、常に座右に地球儀を置いて万国地理を研究していた。

典令に会った彦九郎は皇室の式微を説き議論英発、忠義人を動かした。然し典令はその言を奇としその磊落の他なき彦九郎を憐んで、「貴下は遍ねく諸国を周遊し勤皇を唱える所以は忠であり又義ではあるが、人は或は不忠・不義の事とするかも知れない。貴下の言う事はよいとしても未だ其を言う時が来ていない。唯其だけでなく貴下の言は世に容れられず、禍が反って貴下の身に及ぶ事があるかも知れないから、この事をよく熟慮されたらどうでしよう。」と云った。彦九郎は自分の意見の容れられない儘に、佐伯を去って筑後の久留米に行き、約1年の後遂に自殺して果てたのであった。

庸春と佐伯の種痘

安政2年（一八五五）12月、蒲江浦波当津（名護村）の医師井上庸

春が佐伯藩で初めて種痘を行っている。

これは予防医学上画期的な事業で、如何にこの種痘が佐伯人士に益したかは言をまたない所であろう。

佐伯藩の記録を見ると、それ以前には藩主の嗣子が痘瘡の為に死んだ記事がある位であるから、民間に於ては相当の犠牲者のあった事が想像され、万一助かったとしても生れもつかぬあばた面である。

佐伯で種痘の行われた安政2年（一八五五）はゼンナーが初めて種痘を行った一七九六年から59年後に当り、現代から考えると其の恩恵に浴する事が余りにも遅すぎたとも云い得るが、当時は鎖国時代であった事を考慮に入れねばならないと思う。井上庸春は勿論長崎に蘭学を学び、種痘を佐伯に伝えたであろうと想像するが、現在之を詳にする何ものも残っていない。

青木猛比古

天領柏江村の青木猛比古は幕末の頃国事に奔走し、大阪で幕史の刃に斃れたと伝えられている。

猛比古が京都白河資訓王の内命を受けて九州に下り、一時柏江に帰った時、夜に紛れて佐伯城下に出て有志と相謀った事が伝えられているが、明治維新に佐伯藩からは特に之と云う勤王の士は出なかった。

之は勿論京都に遠い関係もあったであろうが、当時の勤王の志士と称する下級武士や脱藩浪人が口に仁政を唱え乍ら、その行動には不可解な点が多かった為でもあろう。

例えば文久2年（一八六二）9月頃、下総佐倉村で富商が財産争いの紛議を起し、その解決を天狗組の浪人に頼むと、謝金の半分を彼等に取られたのみで話はらちがあかず、遂に村中の者が大勢集って騒ぐと浪人等は狼狽して逃げた事や、仝年12月から翌元治元年（一八六四）正月頃、上総八日市場に浪人が横行して強談を申しかけ金銀米穀を掠奪し諸人が非常に困った事や、これと前後して浪人共が常盤・下野・上総3ケ国の農商の金銀を凡そ10万両掠奪した事等が、いち早く佐伯に伝えられ藩士の自重を促した為であったとも考えられる。

佐伯藩の人口

佐伯藩で初めて人口調査を行ったのは6代高慶代の宝永7年（一七一〇）が初めである。この時はいざ鎌倉と云う立場からであったろう。15才から60才迄の男のみを調査し八、九九四人であった。

その後正徳元年（一七一一）から享保17年（一七三二）迄引続いて

行った都合7回の調査によると、領内の人口は三四、七〇〇人代から三五、六〇〇人代の間を増減し、正徳元年（一七一一）よりも正徳32年（一七三二）の方が約80人減少している。

この減少の原因は間引・堕胎・圧殺の流行によったと云ってよい。これは江戸時代中期以後の全国的傾向で、一面農民をここ迄追いつめた封建的誅求によるものであり、地方農民が誅求に堪えかねて都会に流入した者が多かった為でもある。

然し文化・文政時代（一八〇四～一八二九）になると領内の人口は5万代に増し、明治になると7万から8万になり、大正より漸次増加して現在は10万を数えている。これは徳川中期の間引・堕胎・圧殺等が禁じられた為であろう。

佐伯藩政時代の人口には佐伯領であった津久見・四浦・保戸島の人口が加えられているから、其等の数字を加えると相当の人口が増加している訳である。

龍妙さんと河童

昔久成寺に龍妙さんと言う納所（なっしょ）さんが居た。龍妙さんは片目でチンバであった上に、「鼻たれ龍妙さん」の愛称があった位だから余り見ばえのよい人ではなかったが、易は名人であり角力は強かった。この龍妙さんは頗る豪傑で、碧松明神の眷族だと言う裏の池に住むカッパと仲良しで、毎晩本堂で角力をとっていた。

元治元年（一八六四）中村から起きた火事は段々と拡がり、善教寺を焼き新町を総なめにして火は久成寺に迫った。久成寺の山門は火に包まれ本堂も今にも焼けるかと見えた。龍神の眷族、碧松明神の池に住む数知らぬカッパは、お寺の一大事と池の中から踊り出て、本堂の屋根に登り飛び来る火の粉を払いのけ、或いは防空演習に隣組がやった様に水を運び、特に焼けようとする本堂を守り、遂に本堂を類焼から免れしめた。今にも本堂が丸焼けになるかと心配して火事を見ていた龍妙さんは、カッパの懸命の消火を涙を出しながら見ていた。

このカッパの住む池に臨んで住持日秀が毎夜法華経を読んでいると、或る夜の事この池の中に一個の燈明がともり7日7夜続いたが、7日目の事この燈明が大燈明になったかと見るまに龍神が現れて、久成寺の守護神になる旨を告げて燈明と共に消えてしまった。その時池の中から出て来たと言う木像が久成寺に伝っている。

幕末の海防

ペルーの黒船浦賀来航に太平の夢を破られた朝廷は、文久2年（一八六二）4月厳しく諸候に海防を命じ、仝年5月佐伯藩主毛利高謙は直ちに女島新沖洲に砲台を築き、仝年6月大砲を久部と向島で鋳造させた。

久部村で作った大砲は鉄で作った為に一射で炸裂し使用不能であったが、向島で作った大砲は銅で鋳造した為使用する事が出来た。

其の後江戸から冶工沢田喜三郎を招いて中島町で野砲・小銃を製造し兵備を固めた。これらは当時佐伯藩の外敵に当ろうとする懸命の海防であった。

これ等火器の製造と共に弾薬、火薬が盛んに作られこれに伴う事故が続出し、嘉永6年（一八五三）7月白潟弾薬製造所の発火で死傷者5名、文久2年（一八六二）8月西谷小路の火薬製造所の発火で死者5名、仝年虚空蔵下火薬製造所の発火で2名の死傷者を出した。

享保5年（一七二〇）佐伯藩から幕府に出した書類には領内に打物鍛冶の居ない事を記しているが、其の後領内に打物鍛冶は出来た。国内騒然たる元治元年（一八六八）5月船頭町の鍛冶忠八は胄1領と鉄笠10個を藩に献納し、蒲江の鍛冶幸蔵と切畑の鍛冶佐四郎は各々2本の刀を鍛えて藩に献納した。これは所謂兵器献納である。

五所明神年表

一、慶長11年（一六〇一）　毛利高政鶴屋城の落成に当り城の鬼門を鎮護する為五所明神を修造す。同社は春日・梅宮・住吉・加茂・稲荷の5社を合祀する為に五所と言い、大同3年（八〇八）の創始と伝う。

一、寛文6年（一六六六）　4代高重神供田租額10石を寄進す。

一、貞享3年（一六八六）　5代高久神殿を改造す。

一、元禄4年（一六九一）　氏子石の鳥居を社前に寄進す。

一、正徳元年（一七一一）　6代高慶鎮魂善神祠宇を建立す。

一、享保元年（一七一六）　随身門落成。仝2年随身門に西光山の扁額を掲ぐ。

一、享保4年（一七一九）　前の供田租を廃し禄50石を寄進す。

一、享保6年（一七二一）　神殿拝殿の修繕なり正一位の勅額を鳥居に掲ぐ。総奉行小林九左衛門吉晴。

一、享保7年（一七二二）　橋左古主計を五所明神の祠官とし播摩守に叙す。

一、享保12年（一七二七）　稲荷明神を社内に創建す。

一、享保16年（一七三一）　11月の祭礼に芝居を興行し富座を始む。

一、明和8年（一七七一）　8代高標随身門の背面に金剛力士像2軀を安置す。

一、文化2年（一八〇五）　8月鎮座千年祭を執行し今5年稲荷社を城内に移す。

一、慶応元年（一八六五）　2月神殿火災により焼失す。時に大雨あり皆蓑を着て防火す。

若宮八幡年表

一、慶長9年（一六〇〇）　毛利氏の居城を塩屋の八幡山に築くに当り、その頂上に鎮座していた建久年中（一一九四）緒方三郎惟栄の勧請した石清水八幡を、白潟に移し城の鎮護神とし城山八幡と称えた。

一、延宝元年（一六七三）　社殿炎上す。

一、享保13年（一七二八）　6代高慶社殿を再建し、臼杵の刀鍛冶中蹠権太夫正次に依頼して1尺7寸の剣3振を鍊えさせ御神体とした。

仝年7月遷宮の祭礼を行い高20石を寄進す。再建に当り神主柴田左京の子左平太は京都に上り吉田兼敬卿から若宮八幡の神号を受け、その書状に神主柴田左京之進と書いてあった。以来城山八幡を若宮八幡と改め、左平太は名を左京之進と改めた。

一、寛保元年（一七四一）　3月6代高慶は社内に猿田彦の祠を建立す。

一、宝暦3年（一七五三）　4月社内に住吉神祠を建つ。

一、文化3年（一八〇六）　2月住吉神祠を鳩崎（今の住吉）に移す。

一、嘉永5年（一八五二）　2月社殿炎上す。

一、明治10年（一八七七）　佐伯吉島の神明社の社殿を移し神殿を造営す。藩政時代内町・船頭町は同社の氏子で祭礼の時は大手前に御神幸が行われていた。

一、昭和20年（一九五一）　八幡宮7百50年祭を挙行す。若宮八幡略記を増村記し寄進す。

増村隆也
現住所　津久見市井無田町2ノ14
職業　外科医
所属学会　日本医師会
主要研究テーマ　地方史